

“親友関係”についての一考察 — 文化・社会・心理学的視点からの検討 —

須藤 春佳

はじめに

筆者はこれまで、前青年期の同性親友関係についての研究、とりわけ米国対人関係学派であり精神科医でもあった Sullivan H.S. によって提唱された、“chumship”（チャムシップ：同性同年輩の親友関係）に焦点を当て研究を進めてきた。Sullivan (1953ab) によると、およそ8歳～9歳の頃にあたる前青年期には、特定の同性同年輩の友人のことが自分と同等に大切になり、このような同性同年輩の親友関係を“chumship”（チャムシップ）と呼んで、人間の精神発達上重要な意味をもつとした。親友関係にいる二人は、互いの考えを述べあい、互いの世界を共有する。この関係においては、二人の間でのやりとりに含まれる“consensual validation（共人間的有効妥当性確認）”がその特徴であり、自分の内面世界が他者と共有できるものであるということに大きな喜びを感じ、自分が他の者と違っているのではないか、という根源的な不安をやわらげるような役割を果たすものと考えられている。そしてこのような対人的関わりが治療的であり、それまでの人格の歪みをも修正するほどの機能を果たすとしている。“親友関係”がこのような機能を果たすのは、それが人間の内界と外界との両者にまたがり、橋渡し役をするという意味で、媒介的役割を担うからではないかと考えられる。

Sullivan が同性同年輩の親友関係を人間の

精神発達において大きな意味をもつものとして重視したのは、アイルランド系移民としてアメリカ社会で育ったという、彼自身の生い立ちや生育歴上の文化的背景によるところもあると考えられる。多くの人々が、成長の過程で自然と経験していく同性友人との親密な関係を取り上げ、その重要性を説いた背景には、Sullivan 自身が自らの危機的な状況を乗り越えることのできた体験として、彼自身の人生において同性親友関係が大きな意味を持っていたことが想定できよう。ところで筆者はこれまで、前青年期の同性親友関係について、発達心理学や臨床心理学の文脈からその心理学的意義について論じてきた（須藤, 2008ab ほか）。一方で、われわれの社会や多くの文化に目を向けてみると、同性の友人関係が果たす一定の役割があるのではないかと思われる。そこで、多くの文化や社会において同性の友人というものがどのように位置付けられているのかを調べ、同性同士の友人関係の性質やその機能について考えることが有効であると考えられる。このような問題意識に基づき、本稿では、Brain, R. による、アフリカ社会を中心とした親密な人間関係についての比較人類学的研究を参照しながら、“親友関係”というものが文化や社会の中でどのような位置付けにあるかを検討し、それを踏まえて“親友関係”（友人関係）のもつ意味について考察する。

I. 比較人類学的観点からみた“親友関係”

以下では、Brain, R. (1976) による、中世ヨーロッパやアフリカのフィールドワークを基に行われた比較人類学的研究に基づき、これらの文化、社会において親密な友人関係がどのような位置づけにあるかを紹介する。Brain は、オーストラリア人の社会人類学者であり、カメルーンのバンガ族をはじめ、アフリカを中心としてフィールドワークを行ってきた。彼によると、急激な社会変動のもと、家族と結婚、愛と性、友情や親愛の情といったものの新たな形式が模索されつつある現代に、個人間の関係を異なる文化がどのように扱っているかを研究する必要性は認められているものの、これまで愛や友情の漠然とした性質は、あまりに捉えどころがなく比較研究のテーマとはなり難かった。「『感情』の問題、友人関係の主要因は、それゆえ、人類学関係の論文では多かれ少なかれタブーとされてきた」のである。そんななか彼は、心理学的・構造論的・機能論的諸見地を組み合わせつつ、愛と友情に基づく個人間の関係を研究しようとした。友情とは、二人の人間が、精神的特質や肉体的魅力や私的利益などの組み合わせによって各々その相手を選ぶような関係であり、同時に、社会構造の中で特定の位置を占めている二人の間の形式的な関係—互いの義務の中に法的もしくは超自然的な制裁に基づく拘束力が含まれているような絆—もまた友情であり得る、という。「われわれが友愛の基礎的要素とみなすもの—誠実、信頼、情緒的安定、アイデンティティの相互確認、平等、相補性、互酬性…とといったものは、より広い社会の中で形式的な結びつきが果たしている役割と別物であると考えべきではない。」Brain によると、友情とは、社会構造の中に組み込まれている形式的な関係をも含む。

友情は家庭の外で営まれるのが一般的であり、親族関係や婚姻や出自などを基にした様々な構造を相互に連結するという特定の目的にも役立つ。一方で、「われわれの親族集団におけるすべての親族関係が友情と個人的選択に基づいていると主張できるかもしれない」と述べ、親族関係においても「友情」関係は見出される、との視点を提起している。以下では Brain の記述に沿って、いくつかの点から“親友関係”についてみていこう。

(1) 友情とはなにか

友人とは「性愛や肉親愛ではなく親愛の感情と互いの好意によって他者と結合した人」と定義され、「友情において重要なものは、その対象—友人や恋人—ではなくて愛することそれ自体である」という。

Brain はまた、人間の文化社会を成立させているおおもとに友情があるのだと説く。「重要な点は、友情の機縁やそれを外側から装飾する儀式や契約のいかんにかかわらず、友人間の誠実と愛情を強調しない文化はどこにもないという点である。われわれは好意と信頼を強調する。」ある社会では、友情は暗黙のうちに商売と結びつけられている。これは、交易と友情の双方に交換の概念が存在しているからである。「互酬性つまり友人間や姻族間や交易相手の間のコミュニケーションは物欲や攻撃性などよりもはるかに肝要な人間社会の要件である。」

Brain は「友情を人間社会普遍の特性とするなら、親愛の情は別として、その基本的要素はいったい何なのだろうか？」という問いを立て、それに対して次のように述べる。「実は対等性—対の魂、「もう一人の自分」という観念—こそ友情の本質的要素なのだ」、「“友人”という言葉は、地位の異なる人々を引き寄せて関係を対等化しようとする試みを少なくとも含んで

いる。相補性もしくは互酬性という観念もこの対等性に近い。」

世界のあらゆるところで、友人はさまざまな呼称が与えられている。それらを挙げると、「buddies (バディ)、buds (バッド)、butty (バティ)、chum (チャム)、crony (クロニー)、mate (メイト)、my monkey (マイ・マンキー)、my pal (マイ・パル)」などである。友人と切手やおはじきの交換、誘い合って家に帰る、などといった現象は児童たちにみられる。このように、友人関係の構造には交換関係が内在しており、対等さ、コミュニケーションという関係がその主要な特徴であるといえるだろう。

(2) 制度化された親友関係

—歴史・文化の中にみる友人関係—

ヨーロッパにおける封建時代には、2人の男を「朋友」として結びつける特殊な絆があった。子弟を領主の館に預けて「訓育」してもらおうという習慣があり、子どもたちはそこで作法を習い、武術や馬術やスポーツに励んだようである。幼馴染でもあり種々の技を競い合いもした仲の若者たちは、長じては特別な友人、「朋友」となることが多く、その親密さと競争意識とは、戦士としての彼らの生涯を通じて絶えることがなかった。朋友間の愛情は極めて強固なもので、しばしば血縁の絆もしのぐほどだった。

Brain がフィールドワークを行った、カメルーンのバンガ族は、友情に重要な意味が与えられている社会であり、そこでは友情が肉親愛よりもはるかに価値あるものと考えられている。それは、親族間には厄介な義務関係や、年齢や財産や地位の不平等を包含している一方で、友情だけがこのような不平等を無効にできるからである。

バンガ族では、幼い頃に、“親友”が、同い年の者の中から選びだされる。同い年というこ

とが強調されるのは、双子、あるいは同じ日に生まれた者が最高の友達であるとされているからである。もし親の手で親友を決めてもらえなかった場合、彼らは知人のもとに出入りして、そのうち、全幅の信頼を寄せ得る友を選び出す。友だちになった若者たちは、互いに信頼し合い、ひそかな夢を論じあったり一緒に狩りに出かけたり、恋の冒険を計画したりする。そしてこれらは中世ヨーロッパにおける若い戦士や王子達の教育方法と同じであると想定される。このように、現代においては子どもたちが自然発生的に形成している友人関係が、中世ヨーロッパやバンガ族の社会では、人為的に作られていたのである。

バンガ族は友情を、超自然的あるいは法的な拘束よりも倫理によって裏打ちされた、平等で互酬的な関係と考えている。彼は「美しいから」あるいは「いい人だから」私の友なのだ。格式ばった礼儀作法や贈り物のやりとりがあるのは事実だが、友情は利害を離れたアフェクションの関係とみられている。

これと同じようなことはアフリカの多くの部族社会にも見出される。彼らは首長の息子が政治で悩んだとき、肉親ではなく幼少からの友に頼る。親類は遺産相続等、利害関係にあるため、危険な力(呪術に関する力)をもつものと位置づけられているが、友人はそのような力からは自由なのである。

ポリネシアやメラネシアにおいても、盟友関係はアフリカ同様普遍的なものみなされている。このような友情のいくつかは、愛情と助け合いに立脚した恒久的な関係となって成人した後もずっと続くという。友だち、異性の恋人、地域的な贈り物交換—クラ¹⁾の相手、これら三種類の人を指す呼び名はすべて同一である。南洋ポリネシア諸島の盟友関係は、制度化された終生の契りであり、相互の義務と贈り物交換

によって強化される。若者たちは、集団を組んで漁や畑仕事に精を出す。彼らはその集団の中から特定の友を選ぶ。盟友関係が申し込まれ、それが相手に受け入れられると、この契りは食物の贈答という形で確定される。

また、南米のチノトウレコ族でも、ほとんどの青少年は、秘密を分かち合い、夢を語り合い共に恋の冒険を企てる「親友」を持っている。このような関係は人生の過渡期に最も強まり、制度化されていて、形成される時も破棄される時も、男女の婚約とほぼ同じ手続きと形式とを必要とする。

このように、多くの文化において、「親友」が社会の中での制度として定められ、「対等」に交換関係を結ぶ対象として機能していることがみてとれよう。

(3) 血盟の友

多くの社会は、友情を結婚と同じくらい重要なものとみなし、誓約や儀式や儀礼という防壁を設けてこれを守っている。「血盟」を結ぶこと、すなわち血によって義兄弟の契りを交わすことは、二人あるいは二人以上の男性間の緊密な友情や連帯を正式かつ魔術的に固めるための普遍的ともいえる手段だった。歴史にも民族誌にもその例が見出される。血盟は中世ヨーロッパでも行われていた。

血盟の目的は通常似ている。つまり、友達である二人あるいは特定の目的のために連帯したいと思う二人が、血の交換という儀礼によって聖化された二者関係を結ぶ。この儀礼は、それまで感情の問題にすぎなかった関係に超自然的な拘束力を与える。血を交わしたために、この二人は互いに相手の本質もしくは相手の存在の一部を所有するようになった、とみなされるからである。血盟は友情にある呪術的次元を付加する。もし彼らが「健やかなる時も病める時も」

助け合うという契約を破ったなら、交わした血がその魔力を発揮して病気や死をもたらすだろうからである。血の交換は、すでに形成されている情愛の絆をさらに強化する場合もあれば、中立的あるいは敵対していた相手が味方となる場合もある。

血盟という、「獲得された」友情は特殊な状況の産物だが、儀式と血の交換は絆の確立を助ける。血盟は利害損得によらず、感情的な同盟で友と友を結びつける。血盟は同性間あるいは男女間の深い友愛の現れであり、両者の関係はこの呪術的つながりによって、永遠の完全なる結合となる。愛する人—男であれ女であれ—と血を分有することによって相手の魂の一部を分かち持つのだ、と彼らは主張する。血盟の兄弟は、その関係が絶対的に対等であるために、親族ではなくて友人なのである。親族においては常に、年長者が権利をもち、年少者が従う上下関係が存在する。

個々人の友情から文化の起源にいたるまで、血の交換は常に個人やあらゆる種類の集団を結びつける枠組みとなっている。この枠の中で友情—対等で互酬的な関係—が機能するのである。義兄弟の契は、親族体系の外側において、諸個人を保護—庇護関係に貶めることなく社会的・経済的な交渉の可能性を増大させる。他の社会では、多くの儀式的あるいは社会的な制度を工夫して友情を育てると同時に、その友情を彼らの儀式的社会的そして政治的生活のために役立てているのである。もっとも、血盟関係の制度はヨーロッパの植民地主義、貨幣と国際貿易の導入により、これらの慣習、制度はなくなりつつある。

(4) 親友関係に象徴されるものとは

—双子としての友人

以上、親友関係を、個人同士の絆のみならず、

社会生活を送る上での政治的、社会的、機能的関係、いわばネットワークとして結ばれる関係としてみてきた。ここでは、親友関係そのもののもつ象徴性—対等な二者関係であるところから連想される、二元性、双子、というイメージを手掛かりに考えることとする。

Brainによると、対等性と相補性は友情の基礎的属性であり、カップルあるいはペアの相補性と対等性の最も明快な象徴的表現は双子であるという。二人にして一人、一人にして二人、半身と半身…という双子は、どの国でも完全無比の友である。アフリカの宇宙論や神話においては、双子は、カップルの融合、完璧な対、心底からの結合を象徴している。双子の二元性は連帯と交換を表し、古代ギリシャやアフリカでは友情を象徴している。彼らは一人にしてしかも二人なのである。(中略)双子が同時にしかも同じ子宮から2人の人間として相補っているという理由によるものである。双子は、ほとんど全世界の創世神話に見出されるが、神話にでてくる双子の親密さは、友情の理想となっている。たとえばバングの天国では、魂はふたつ一組になってさまよっており、双子が親友としてこの世に生まれると信じられている。

バング族においては、双子を「親友」と呼ぶ。親友たちは「双子」として認められ、真の双子と同じ超自然的な地位へ昇格する。バング族は、友情—「獲得された」友情(心の友)であれ、「定められた」友情(道の友)であれ—における対等性に力点を置いており、この関係では地位の高低を無視することが許されている。ひとつの子宮から生まれた双子は真の対等性の完璧な表現であり、同時刻に生まれた2人の友は、二人にして一人というこの関係に近い。このように双子はこの上なく平等である。バングでは、双子の兄弟をもたずにうまれて霊界の友あるいは双子にきた子どもを同年齢の友とペアにするこ

とが、誘惑されて霊界に帰ってしまうという来たるべき危険を未然に防止することを意味している。

バングにおけるもっとも親密な友は、双子が霊界で旅の道連れだった者かである。双子として生まれることのできなかった子どもには、できるだけ近くで同時刻に生まれた子どもを両親が探し出してやって、双子として二人を結びつける。

双子への尊敬、双子と友情の連想はアフリカでは珍しいことでもなく、この問題は人類学者の間で議論されてきた。バング族にとって、双子は根源的で社会的な存在、二つの部分の完全な結合であり、コミュニケーション、相補性、同盟、友情を表している。原初には、すべての人々は二元的な宇宙で双子のように対をなしており、ひとつの完全な全体の、対等で相補的な半身であった。一方、ペンデ族には一人の人間に二つの魂が宿っているという考えがあり、双対性(ツインネス)の観念は、多くの民族の宇宙論における主要な要素である。

これらの双子にまつわる現象を踏まえ、Brainは次のように考察する。「双子の主題から学ぶべきものは、男や女が自分の個としての存在を完全なものにしようとする欲求を双子が明快に表現しているということである。人間は補い合うべき自分の片割れを探し求めている二元的な存在である。友は相手の中に自分に欠けている資質を求める。ある意味では、双子のイメージにはナルシス的な要素もある。2人の友は、相手の中に自分自身のアイデンティティを映しだそうとするのだが、同時に、一体化によって神代における両性具有の統一を回復しようとするのだ。人間の原初的の二元性の分裂は、神話においても実人生においても混沌と無秩序にいたると考えられている。この類落は、男女あるいは双子、友人間の結合を希求することによ

てのみ償いうるのである。」このように考えると、人間が友人を求めるのは、不完全な自分の存在を満たそうとするためであるということになる。社会生活を送る上で重要な役割を果たすから、というだけではなく、そもそも人間の存在そのものが二元性をもつということである。霊界にいる分身の存在、母親の胎盤は赤ん坊の分身であるといった信念は多くの文化に共通してみられるが、その背後には、原初的に人間は対をなしている存在であるとの考え方がうかがわれる。

友人関係、親友関係は、双子そのものではないにせよ、その関係自体の性質は、双人になぞらえられるような、「分身」的なイメージが強くと考えられる。多くの人々は双子として生まれてこないが、唯一無二の友人関係を求める心性には、双子が互いに相手を支え合うように、自らをそこに映し出し準拠枠とするような、対象の希求性があるのではないかと考えられる。

(5) 親友関係と性別

同性友人関係には、性差が顕著である。「女性性は親友について同じように感じてくれる人を求めるのに対して、男性は同じことをするのが好きな人を親友として求める」(Sherrod,1989)と言われるなど、これまでの友人関係研究の中でも、その関係の性質自体にみられる性差が明らかになっている。また、性別を超えた親友関係は成立するのだろうか？これらの点について考えることとする。

① 友情と性差

男たちの友情の多くは、高度の危険をはらんでいるような状況－オーストラリアの流刑者や奥地労働者、深海に潜る漁師や犯罪者や兵士たち－のもとに見出され、このようなところでは、堅い集団的友情があれば大いに有利になる。また、アフリカでは、個人的な固い友情への欲求

が男性の結社の内にさえ認められる。ディディング族の場合、同一の年齢階梯システムに属する2人の男の情緒的な固い友情が、組の異なる戦士たちを特殊な友情で結び付ける制度によって促進されていた。

一方、女たちは女らしさや女であることを誇りとして女だけの集団をつくる。バンガ族では、女性だけの秘密結社や年齢組や工芸グループを作っている。ここには女性特有の世界が開かれており、さげすまれることもない女だけの世界、正真正銘の女性性を誇りとして毅然とした態度を保っている。この女性の世界を支えているものの一つに、二人の女性がむすぶ固い友情がある。これは、同じ時に生まれた二人であることもあれば、気のあった友達ということもあり、また地位の同じ者（王女、巫女、占い師）であることもあるし、あるいは一夫多妻制の首長の屋敷内で小屋が隣り合っていたというだけの場合もある。このような女友だちは、互いを信頼し、誠意を尽くし、仲間意識をもつ。一夫多妻制の社会にあって、妻たちが「親友」になるのはほとんどあたりまえになっており、女友だちである妻たちは、生活の多くの場面で協力し合い、共に行動する。同じ屋敷内の女友だちは、家庭内のいざこざや夫とのいさかきがあった際には協力して事にあたりに、子どもに必要な最低限の援助を共に夫から引き出すのだという。

このように、多くの社会において、同性同士の仲間意識や絆を形成することにより、社会生活を円滑に送っている様子がうかがわれる。同性同士の友情は、私的なものであると同時に社会的な生活を成立させる上でもなくてはならないものであるといえよう。

制度が作られるところには人間の内的な必然性もあることが想定されるが、上に示した男性の階梯制度に組み込まれた個人間の「友情」、そして女性が終生にわたって結ぶ友情の意義と

は何か。集団としてだけでなく、個々人の間で「友情」を結ぶことの必然性とは何だろうか。Brainの次の言葉はそれについての一つの答えを与えるものではないか。「真の友情とは個人と個人の問題であり、その喜びは2人の友人の親密な相互作用の中にある。彼らは、人格を相補って高めあい、集団的相互作用がもたらす安定した匿名的な感情や性の生物学的圧力とは全く次元の異なる情熱的報酬を与え合うのである。」

② 男女の友情

男女間に親友関係は成立するのだろうか？ Chumshipの定義として、「同性」で「同年輩の」という条件がつけられているが、やはり「同性」であることの意味は大きいだろう。Brainは、男女間の友情に関しては、性的なものが介入するため、性的なものを抜きにした純粋な献身が全うされることなどあり得ない、という説が根強いことを指摘する。一方で、彼は次のようなバンガ族の例を挙げている。

バンガでは男女とも幼児期に友達を作るが、この友情が恋愛と混同されることは決してない。それは終生の友情で、大人の男たちのうちとけた仲間関係とさして異ならない。男女の盟友がいっしょにいるとき、彼らの関係は次のようである。彼女はどんな男に対してでもとる芝居がかった服従的な態度を崩し、自由に冗談を言い合ったり気楽におしゃべりしたり、いっしょに食事したりさえ—これは通常、男女の間では、特に夫婦の間ではタブーとされている行為—する。このように、友情のもつ対等性は、根本的な不平等性をも克服する。それは、男女が性をぬきにして、あるいはともかく性に惑わされずにコミュニケーションすることを可能にする(傍点筆者)。

友情が尊ばれている南ガーナのヌゼマ族では、男女間の生涯にわたる友情が制度化されて

おり、このような2人は「兄妹のようになる」という。二人は共に眠りさえするがあらゆる欲情を排しており、この社会ではこれをおかしく思う人もいない。

このような状況を受け、Brainは次のように結論付ける。「性が愛の背後に潜む力の源泉であることについては誰も異存あるまいが、それは、公然と表に出るわけでもなければ、必ず表に出るというわけでもない。重要なのは、落ち着いた情愛であり、友情であり、親しい交際であり、人のことを想い人からも想われないという欲求なのである。」

このように、夫婦関係ではない友人関係を結ぶことによって可能になるのは、役割を越えた、対等な関係が結ばれることであるといえよう。現代においても、異性の親友関係というものは存在しうると考えられる。筆者がこれまで行ってきた調査研究の中でも、身近な友人として、同性ではなく異性の友人を挙げる人もみられた。そのような男性の例を挙げると、同性友人であると相手との間で「張り合ってしまう」、「弱みを見せられない」という競合関係が発生しやすいが、異性の友人関係であれば、そのようなプライドを抜きに気のおけない友人として接することができるということであった。親しい交友関係を同性と行うのか異性と行うのかについては、個別性の高いものであるかもしれないが、深層心理学的視点に立つならば、対等な関係として異性と友人関係を結ぶ際には、一人の個人の中にある「男性的な部分」および「女性的な部分」(ユング心理学でいうところの内なる同性や異性を指す、「アニムス」や「アニマ」)を通して相手と関わることになるのかもしれない。Sullivanはchumshipを論じる際、「性欲の到来する直前の時期」である前青年期を強調した。男女間でこれを成立させるためには困難さも大きいだろうが、性的な衝動に左右されな

い、純粋な親密性の関係を「親友」関係と考えるとよいのではないだろうか。

II. まとめ

以上、Brainの研究に沿って、多くの文化や社会のなかにみられる「友人関係」「親友関係」についてみてきた。ここでは彼の研究を受けて、親友関係に働いている原理をいくつかの観点からまとめてみることにする。

(1) 社会や文化の中の「親友関係」

上でみてきたように、多くの文化の中にみられる制度化された親友関係のありようをみるなかで、親友関係とは、決して私的なものにとどまるのではなく、それ自体の持つ「対等さ」、「互酬性」、などの性質により、社会を動かすような関係として、社会システムの中に組み込まれるものであることがわかった。特に、一定の規模の社会、社会を構成している人員の範囲が限定的である社会においては、人間関係が「交換関係」として機能し得るため、家族と家族外のものとのやりとりが社会生活を営む上での要となろう。このような社会において、親族関係でもなく、完全な他人でもない、その間に存在する存在としての「友人」の存在は、いわば家族の内と外の媒介的役割として、社会生活の潤滑油のような役割を果たしてきたものと思われる。

一方、Brainは人間のもつ攻撃性を友人関係との関連で論じている。社会を維持していく上で、どの文化においても友愛が重視されていることは確かであるが、「友愛は攻撃の本質的部分なのである」、「種内攻撃の歴史はパーソナルな友情や愛の歴史より何百万年も古い…種内攻撃はその片割れである愛がなくても存在し得るが、逆に攻撃がなければ愛は存在しない」とい

う。「愛や友情—協同や互酬性、交換や同盟—が個人の幸福や文化の存続にとって、攻撃よりも重要とまでは言わなくとも、少なくとも攻撃と同程度に重要であると主張したい。」このように、友人関係の根幹をなす愛は攻撃本能や憎しみから生じるものであるといい、攻撃性と愛の密接な関連について言及する。

親友関係（友愛の精神）は人間の本質的なものなのだろうか？多くの文化において、親友関係を結び社会生活を行うことが、人間を内部抗争から救い、共存への道を開いてきたことは確かであろう。しかしながら、人間は本質的に攻撃性を備えた存在であるからこそ、友情や友愛が重視されるという視点も重要であろう。Brainは「愛は攻撃の本質的部分なのである」というが、愛と攻撃性は同じ現実の表と裏のような関係であると捉えられるのではないか。

(2) 「もうひとりの自分」としての友人

—心理学的視点から—

次に、親友関係および友人関係を、個人間の関係として捉えた時に、その手掛かりとなるのが「双子」イメージであった。人間は原初より補い合うべき自分の片割れを探し求めている二元的な存在であり、友人を求めることは、相手の中に自分に欠けている資質を求めるにも通じるという視点は、「双子」のイメージから連想される心性として考えられた。友人関係を、より個別的な関係として捉えるならば、個人が自らのアイデンティティの形成や確認のために、友人を求めるという視点もあるだろう。友人は、いわば、「もう一人の自分」として捉えるような視点である。

一方、Brainは次のように言う。「(西欧文化は友人同士の類似性を強調するが) 交換、互酬性、友情、これらは皆競争と対立の要素を内包している。そっくり同じであることは活力をそ

ぐが、相異なることは活力を高めるものなのである。」人は友人の中に自分を見出そうとするのかもしれないが、まったくの同一人物であるわけではなく、そこに生じる対立や競争関係を通じて、個人が自らの個別性を求める動きが生じると考えられる。このような意味で、二元的な関係である友人関係は、発展を内包しているといえよう。

最後に、友人関係と性別のテーマについても触れられた。男性同士、女性同士の友人関係はそれぞれに特徴がみられたが、一方で男女の友情についても対等で純粋な友人関係は存在するという点について考察された。

以上、本論では特に友人関係に焦点の当てられた Brain による人類学的研究を中心に論じてきた。今回は限られた文献を中心に文化人類学的な視点を紹介したが、今後は、文学作品等も参照しつつ、多角的な視点から友人関係を分析することが課題である。

【文献】

Brain, R. (1976) *Friends and Lovers*. Basic Books, Inc., Publishers, New York.

Brain, R. (1976) *Friends and Lovers*. 木村洋二訳

(1983) 友人たち／恋人たち みすず書房.

石川栄吉他編 (1987/1994) 文化人類学事典 弘文堂.

Sherrod, D. (1989) “The influence of gender on same sex friendships.” Hendrick (Ed) *Close relationships*. Newbury Park, CA: Sage. pp.164-186.

Sullivan, H. S. (1953a) *Conceptions of Modern Psychiatry*. 中井久夫・山口隆 共訳 (1976) 現代精神医学の概念 みすず書房.

Sullivan, H. S. (1953b) *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. 中井久夫他訳 (1990) 精神医学は対人関係論である. みすず書房.

須藤春佳 (2008a) 前青年期の親しい同性友人関係 “chumship” の心理学的意義について－発達の・臨床的観点からの検討－. 京都大学大学院 教育学研究科紀要, 54, pp.628-640.

須藤春佳 (2008b) 前青年期の親友関係 “chumship” に関する心理臨床学的研究. 京都大学博士学位論文.

注

- 1) クラ (Kula) とは、ニューギニア島南東端周辺の諸島群でみられる儀礼的贈物交換の体系を指す。クラは経済的活動のみならず財物の交換を通じた威信の獲得にかかわり、個人や集団間の社会関係を確立させて平和を生み出すという政治、社会的役割も果たすとされる。

Abstract

A Study on Close Friendship: from Social, Cultural, and Psychological Viewpoints

Haruka SUDO

The purpose of this paper is to discuss close friendship from social, cultural, and psychological viewpoints. The definition of friend is made by Brain R (1976) as follows: person who is connected by means of affection or dearness, not by blood relation or Eros. In order to consider the meaning of close friendship, we referred to the research of comparative anthropology of Brain. Through his study, we could see how close friendship worked in some culture and society, especially in some tribes in Africa where friendship played very important role. Historically, friendship was formed as a social system in the Middle Ages in Europe. Moreover, trust and affection between friends are emphasized in almost all culture. Thus, friendship is regarded as a fundamental aspect of human nature.

Friendship is a relationship which has equality and complement nature, and it has played the role of exchange in some social systems. Also, some societies regard friendship as important as kinship, because it proceeds economical and social negotiation outside the kinship system. Several examples are shown in this paper.

In order to see friendship from a psychological point of view, the image of twins was proposed in connection with close friendship. In some society, a close friend is recognized as a substitute for twin, which represents half of one's soul. The image of twin-ship represents "a pair of souls", or "the other self." Brain says that the fundamental aspect of friendship is equality, the form of a pair in soul, and "the other self." So he thinks the image of twins is connected with friendship.

Finally, we discussed gender difference in close friendship, and close friendship between the sexes. Men and women can form close friendship with each other. Equality, or the basic nature of friendship, enables men and women to communicate with each other apart from their sexual drives.

Key words : close friendship, social-cultural viewpoints, psychological viewpoints

キーワード : 親友関係、文化・社会的視点、心理学的視点